

布原台地の開墾

かいこん

江戸時代、津山藩森家二代藩主・森長継は、領内の石高を増やすため、耕地面積の拡大を計画します。

しかし山間部の美作国内は、海浜の埋め立てなどで耕地面積を広げることができないため、平地にある屋敷を山麓に移転させ、その跡地を水田とする政策を行いました。これを「山上がり」といい、各地で大規模な村落移転が行われました。『美作略史』という書物には、鏡野町域でも、山上がりが行われたことが書かれています。この他にも荒地を開墾して水田を拡げ

ることも行いました。その中で最も大規模な開墾が行われたのが布原台地でした。

江戸時代の初め頃、布原台地一帯は古川村に属していましたが、草が生い茂る荒地地で、牛飼場として利用されているに過ぎませんでした。これは水利が不便で、耕地に適していなかったことが大きな理由であったと思われませんが、津山藩の政策によりこの地の開墾が実施されました。開墾が行われた年は諸説あり、『作陽誌』には慶安元年（一六四八）、『武家聞伝記』

には正保二年（一六四五）に始まり、翌年完成したと書かれています。

まず水田を作るにあたり、8kmほど離れた香々美から水路を引きました。米が経済の中心であった江戸時代においては、水利権の確保は村の重要事項であったため、藤屋・香々美中村・市場・公保田・沢田・沖の各村を通過する水路の建設は様々な問題があったことが想像できますが、津山藩の政策による開墾であったため、このような多くの村を経た長距離の水路の建設が可能となったのでしよう。

開墾にあたっては、布原上から南へ向けて源三郎丁場と一番丁場から九番丁場に区画し、工事が行われました。現在も地名として残るこの区画名は、この工事の際につけられたものです。この

います。

『武家聞伝記』によれば、工事が完了した翌年、美作国内の大庄屋を通じてこの新しい土地に住む入植希望者を募集し、二〇名が選ばれました。この入植者達は郡奉行ら藩の役人の立ち会いのもと、古川村の庄屋宅でくじ引きによって持ち分となる耕地を決め、開墾された土地の配分が行われました。その後、布原台地には古川村付属の村となる布原村が成立しました。布原村成立の年代についてもはっきりとわかっていませんが、「布原村銘細帳」（安永六年（一七七七））に、正保年中（一六四四～四七）に村号を改めたと書かれていますので、入植が始まって間もなく村の形態が整ったことが窺われます。こうして成立した布原村は、その後上流の村々と水利権をめぐるたびたび紛争もありましたが、開墾された水田も近年は道路や店舗・宅地になるところが増えていき、布原の風景も変貌しつつあります。

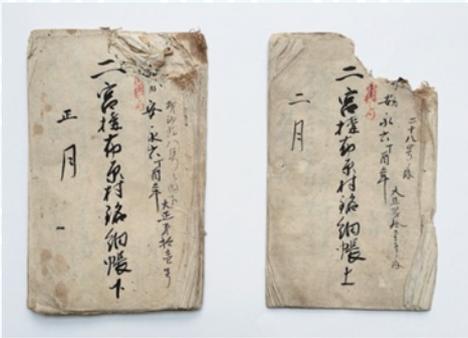
参考資料：『鏡野町史』通史編・史料編、『鏡野の歴史史料集（一）』、『新訂訳作陽誌』

生涯学習課 目下

電話(0868)54-7733



布原の水路



布原村銘細帳



現在の布原

の工事によって、布原台地は約五〇〇石（米一石は一〇斗）の増収となりました。これは、記録に残る津山藩森家時代の領地内での開墾としては最も多い増収で、これに次ぐのが新庄村の約一九四石ですから、布原の開墾があったのがわかると思